

# 近代ヨーロッパにおける進歩の理念

三 宅 正 樹

## 序章 歴史における時間の観念と進歩の理念

筆者（三宅）は、1990年8月にマドリッドで開催された、国際歴史学会議第17回大会において、ポーランド科学アカデミーの元会長の中世史家アレクサンダー・ギエイシュトル博士とともに、筆者のアイデアにもとづいて「ヨーロッパとアジアの歴史叙述に現れた時間の意識」という方法論部門の部会を組織した。その際の基調報告「歴史的時間についての総論的考察」の中で、歴史における時間の観念の類型として、次の八つの類型を考えることを提案した。(1)振動する時間、(2)円環的（循環的）時間、(3)ニュートン的な直線的時間（もちろん素朴な形で現れる場合が多いが、無限の直線によって象徴される）、(4)キリスト教的直線的時間（天地創造から最後の審判の終末までの時間、初めと終りを持つ線分によって象徴される、Miyake, 1997B参照）、(5)無限に上昇する直線的時間（進歩の理念によって代表される）、(6)無限に下降する直線的時間（絶えざる退歩と衰退、黄金時代は過去にのみ設定される）、(7)点の断続的連続としての時間（イスラムの思想家アル・アシュアリーの思想的系譜に立つイスラームの原子論に代表される）、(8)螺旋状の時間（十八世紀イタリアの思想家ヴィーコが代表する）。このうちの、(5)無限に上昇する直線的時間を体現する進歩の理念について、以下に考察を試みたい。このような類型を考える上で、真木悠介『時間の社会学』から豊かな

示唆を与えられた。(Miyake, 1990, 真木悠介, 1981年, なお, 三宅, 1993年, Miyake, 1997 A 参照)

## 第1章 「古代・現代論争」とベリー

近代ヨーロッパにおける進歩の理念の成立に対して、「古代・現代論争」(Querelle des Anciens et des Modernes; Quarrel of the Ancients and Moderns)は、決定的な重要性を有したと考えられる。このような見解を最初に確立したのは、ケンブリッジ大学の歴史学の欽定教授ベリーの著書『進歩の理念』であった。「古代・現代論争」を対象とした同著の第4章の冒頭部分を訳出して、議論のてがかりとする。

〈体系的な思想家の圏外でも、ひろくゆきわたっていた衰退の説は、十七世紀初頭に挑戦を受けつつあった。この挑戦は文学論争をひき起こしたが、この論争はフランスとイギリスで、古代人と現代人の長所の比較をめぐる、ほぼ百年にわたって行われた。論争が最も激烈であり、公衆の関心が最も激しく掻き立てられたのは、文学、特に詩の問題についてであった。しかし、論争に加わった人々のなかで最も有能な者たちは、議論を一般的な知識の領域に拡大した。「古代・現代論争」はふつう、文学史の中で、奇妙で、むしろ滑稽なエピソードとして片付けられてきた。私の考えでは、オーギュスト・コントこそ、論争のより広い意味に注意を喚起した最初の人間のひとりであった。

実際、この論争は、思想の歴史の中でかなりの重要性を有している。それは、ルネッサンスの知的な軛 (intellectual yoke of the Renaissance) に対する反乱の一部であった。攻撃をかけた側の現代派の主張は、批評の、死者の権威からの解放を表現していた。そして、彼らがそれに責任のある、趣味の悪さにもかかわらず、かれらのポレミックは、純粋に文学的な側面にお

いてでさえ、M. ブリュンティエールが説得的な形で示したように、フランスの批評の発展の中で、明白に重要であった。しかし、批評の諸問題が提示された形態は、論争をいやでもより重大な問題に接触せしめるにいたった。現代の人間は、著明な古代人と、同じ条件で競走出来るか、それとも現代の人間は、古代人よりも知的に劣っているのか、という問題は、次のようなより大きな論点を内包していた。それは、自然はみずからの力を使い果たしたのか、自然はもはや、自然がかつて生み出した人々と、頭脳と活力において対等な人間を生み出すことが出来ないのか、人間性は使い果たされたのか、それとも人間性の諸力は恒常的で無尽蔵であるのか、という論点である。

現代派の旗手たちによる、自然の諸力の恒常性の主張は、衰退の説とまっこうから対立するものであり、彼らは、疑いもなく、この説の信用を落とさせるのに貢献した。私たちがこのことを理解するとき、知識に関する進歩の教義の最初の明確な主張が、古代と現代をめぐる論争によって触発されたことを見出すのは、驚くべきことではないであろう。〉(Bury, 1932, pp. 78-79.)

ベリーからの直接の引用は、以上の、第4章の序論の部分にとどめるが、これからしばらく、第4章に展開されている論旨を辿ってゆきたい。ベリーによれば、「古代・現代論争」の主要な舞台はフランスであったけれども、この論争に最初に点火したのは、イタリア人のアレッサンドロ・タッソーニ(Alessandro Tassoni)であった。彼は、彼の同時代人たちの偏見を明らかにし、新しい見解を発表することに執着していたが、ペトラルカやホメロス、アリストテレスの著作に攻撃をかけたことが、イタリアで大きなスキャンダルをひき起こすことになった。古代人と現代人の最初の比較論は、彼の著作『雑考十卷』(*Dieci libri di pensieri diversi*, Capri, 1620)の第十巻に見出される。(Bury, pp. 79-80.)

なお、ここで「古代・現代論争」という訳語について述べておきたい。ふ

つう、この論争は、「古代・近代論争」と訳され、この「古代・近代論争」という訳語がすでに定着している。しかしながら、当時の人々の意識では、当時の人々の生きていた、当時の人々にとっての今、現代と、ギリシャ、ローマの古代とのいずれがより優れているか、という論争であったのであり、二十世紀末の現在から見れば、この論争が盛んにたたかわされた十七世紀は、近世あるいは近代であって、現代ではないということになるが、十七世紀の人々にとっては、十七世紀こそが現代であった。そして、「モデルヌ (modernes)」という言葉は、論争の当事者によって、「我々現代人」という意味で使われたのである。「古代・近代論争」と訳してしまうと、そういう「モデルヌ」の意味と食い違いが生じてしまう。以下、従来の定訳を取らずに、敢えて「古代・現代論争」という訳語で統一することにする。筆者の知る限りでは、「現代」という訳語を採用しているのは岩坪紹夫の論文「進歩の観念」だけであり、岩坪は、「古代現代優越論争」と訳し、また「現代派」という訳語を使っている。(岩坪紹夫, 1965 年, 268-272 頁)

さてベリーによれば、タッソーニは、芸術は経験と労働によって完成へともたらされるものであるから、近代のほうが有利である、という議論を批判するところから出発する。同じ芸術、同じ研究がつねに最も強力な知性によって途絶えることなく追求されている訳ではなく、より劣った人々に受け継がれて退化したり消滅してしまったりするからである。タッソーニは、ローマ帝国滅亡後のイタリアがその例であり、何世紀もの間、イタリアでは芸術は甚だしく水準が下がった状態にあった、と考える。このように、古代と現代との公平な比較をめざすといいいながら、彼は近代のほうに軍配を上げている。その際に、彼は文学や芸術だけでなく、衣装までを含めての文明の物質的な側面をも、考察の対象としている。論争は、後では文学や芸術に限られてしまったから、彼のほうが広い視野をもっていたといえる、とベリーはいう。(Ibid., pp. 80-81.)

タッソーニの著作は、フランス語に訳された。そして、おそらくフランスでアカデミー・フランセーズの創設に参画した劇作家のボワロベール(Boisrobert)の知るところとなった、とベリーは推定している。ボワロベールは、創立直後の同アカデミーで1635年2月26日、講演を行い、ホメロスの作品に、激しく、口汚い攻撃を加えた。これ以後、ホメロスの作品がフランスでの現代派の絶好の標的となった。(Ibid., p. 81)

そもそも、ホメロス攻撃というのは、タッソーニが始めたことであって、アメリカの社会学者ロバート・ニスベットの名著『進歩の理念の歴史』によれば、タッソーニは、ホメロスの筋や性格描写、言葉などの欠点を指摘し、タッソーニと同時代のイタリアの作家が、もしイーリアスやオデュッセイに出て来るような馬鹿馬鹿しい人物像やありそうもない出来事を描くとすれば、一瞬たりとも作家として生き延びることは出来ない、とまで極言した。(Nisbet, 1980, p. 151.) ボワロベールより大分後になって、デマレ・ド・サン＝ソルラン(Desmaret de Saint Sorlin)という詩人が、古代攻撃を再開した。彼はファナティックなキリスト教信者であり、キリスト教は、ホメロスやソフォクレスが扱った題材よりも、詩人にとってはるかにすぐれた題材を提供しているのであって、キリスト教の詩人は異教徒の詩人を圧倒しなければならない、という説を主張した。彼によれば、現代は実り豊かな秋であるのに対して、古代は花の少ない春である、ということになる。現代は、古代に対して、老人が子供に対してそうであるように、知識や経験において優っている、とソルランは主張した。この「古代・現代論争」を、当事者たちがどれほど真剣に受けとめていたかは、すでに、古代派の詩人のボアローとも論戦をまじえていたサン＝ソルランが、死の前に、現代派の旗手の役を、若いシャルル・ペロー(Charles Perrault)におごそかに譲ったことから知られる、とベリーはいう。(Ibid., pp. 81-82.)

ペロー(1628-1703年)は、「眠れる森の美女」「赤ずきんちゃん」「青ひ

げ」「長靴をはいた猫」などの童話の収集家として記憶にとどめられているが、「古代・現代論争」でも重要な役割を演じた詩人であり文筆家である。(朝倉朗子訳, 1982年) 1687年1月27日に、ペローがアカデミー・フランスで発表した自作の詩「ルイ大王の時代」は、この論争をあらためて本格化させた。ペリーによると、彼はこの詩の中で、ルイ十四世の時代を賛美し、古代ギリシャ・ローマの天才たちは、今から見れば、色々と欠点が目立つのであり、プラトンは退屈だし、ホメロスも、もしルイ十四世の時代に生まれていれば、もっとはるかにましな叙事詩を書いたことであろう、と述べた。そして、自然は不変であり、古代だけでなく、いつの時代にも同じような天才を生み出す能力を備えている、と主張した。(Bury, pp. 83-84.) 自然が天才を生み出す能力には時代による変化はない、というのは、現代派が繰り返し古代派に突き付けた論点であった。

## 第2章 現代派の論客シャルル・ペロー

ペローは、ボアローらの激しい反論を触発したこの詩を書いたあと、大著『古代人と現代人との対比』を四部に分けて1688年から1697年にかけて刊行した。赤木昭三は、すぐれた論文「進歩の思想形成についての一考察：古代派・近代派論争をめぐる」の中で、この大著について次のようにその内容を紹介している。赤木はペロオと表記している。

〈つぎにこの論争において近代派は、知識における進歩の思想を文学美術の領域にも適用した。文学における進歩の思想は、すでに論争前の一六七〇年代からデマレやペロオによって漠然とながら表明されてきたが、論争を契機として、とくにペロオの大著『古代人と近代人との対比』(1688-97)において一層明確に一層詳細に、さらには文学以外の芸術にも及ぼされることによって、一層広範囲に主張されるにいたったといえることができる。すなわち

ペロオによれば、現代の文芸が古代のそれに優越していることは明らかであるが、この優越の「原因」はまず文学美術の技法（アール）における進歩である。「すべての芸術はわが世紀において古代よりも一層高い完成の度合に達した」。なぜなら「時とともに、その無数の秘訣が発見された」からである。それはたとえば絵画においては「濃淡画法（クレール・オブスキュール）」の発見であり、文学作品では「方法」すなわち内容を明晰に順序正しく表現する技術の発達であった。第二の「原因」は経験の蓄積であり、それによって前代のよきを保存し、欠点や凡庸な点を捨てて作品を一層完成に近づけることができる。つぎに、以下の二点はとりわけ文学に多く関係することであるが、第三の原因として認識の進歩、なかならず人間の心と情念についての認識の進歩があげられる。ペロオによれば「古代人は七つの惑星ともっとも顕著な星に関しては概略われわれと同様の認識をもっていたが、惑星の衛星やわれわれが発見した多数の小さな星は知らなかった。同様にかれらは魂の情念については概略われわれと同様知っていたが、それに伴う無数の細かな感情や情念の発生にからまる無数の小さな状況は知らなかった」。さまざまな「欲望や嫌悪」についても同様であり、こうしてわれわれの情念や欲望に関する知識は、他の諸科学の場合と同様、古代人とは比較にならぬほど細やかにデリケートに複雑精密になり、それが文学を古代とは比較にならぬほど豊かにしたといえる。最後に、詳しくはつぎに述べるように、礼節の雅び、ギャラントリイの細やかさ、社交の洗練は時と共に進歩する。そして礼節にあふれ、デリケートなわれわれにとって、粗野で粗暴で「自然な」習俗を描いた古代の文学は読むにたえないものとなった。文学は「時と場所と人間に適合したものでなければならない」のであって、進歩した習俗に合致した、洗練された、デリケートな現代文学こそ最上のものなのである。

このような主張の幼稚さ、奇矯さ、一面性を笑うのはやさしいし、事実それはまもなく見捨てられる。しかし輝かしい古典文学全盛期の直後に、一種

の危機意識が生んだこの過激な主張は、その衝撃的な力でもって文学を新しい道の模索へ向わせることになったし、さらにあらゆる完成、亀鑑を過去に求めるルネサンス以来の強固な固定観念をゆるがして、文学芸術においても進歩はありうることを意識させたという点で、進歩の思想の定着、浸透に少なからぬ貢献を果したといえるのである。〉（赤木昭三、233-234頁）

赤木論文は、現代派のフォントネルが、知識の進歩とあわせて「野蛮」から「礼節」へ向う習俗の進歩を重視した事実を指摘したあと、ペロオについて次のように述べている。

〈この点はペロオによってなお強調される。ペロオによれば、「礼節と趣味は時と共にみがかれる」。ホメーロスの英雄たちは「粗暴で残酷で移り気で」、「不正で、怒りっぽく、激しやすい」。かれらはまるで「人足」のようにいさかいをする。恋愛においても現代の洗練されたギャラントリイを知らず、自然な欲望の充足をもって事足りりとする。テオクリトスの田園詩に登場する恋人たちは、リュートの代りに斧をもって恋人を求め、あまつさえ、想像もできないことだが、晚餐に招いた恋人に平手打ちを食わせさえする。何という「いとわしい習俗、いとわしい時代」、そしてこれをしも自然であるというのなら、何という「いとわしい自然」であろう。そこでは王女が川へ洗濯に行き、王の邸の前には、まるで今日の農家のように堆肥が積まれてある。現代の洗練された礼節、優雅な生活様式とは何という相違であろう。またペロオは知識の進歩と共に、人間の生活を豪奢に、快適にするあらゆる技術の進歩をも忘れない。百五十年前「おそらくパリには一ダースの豪奢な幌つき四輪馬車も、一ダースのつづれ織もなかった。今日ではすべての家がつづれ織で飾られており、道路は車で大混雑だ」。そしてかれはつづけて古代の茅屋と芸術技術（アール）の粋を集めたヴェルサイユの宮殿や当代の豪華な建造物を、古代のくり舟と今日大洋を横断する大帆船を、さらには、くもの糸からヒントをえた太古の幼稚な織布技術と今日の精巧な絹靴下編機までを、



倦むことなく比較する。こうしてペロオによれば、かつては「無知で野蛮だった」人類が時と共に進歩し、したがって「一番最後にきた」現代は「あらゆる世紀のうちでもっとも知識があり、もっとも洗練され、もっとも趣味よき（デリカ）世紀」なのであった。人類の歴史を始源の黄金時代からの墮落の歴史とみる古代派の思想にたいして、ペロオはここに歴史とは本質的には、つぎの世紀の流行語を先取りすれば、「文明」の進歩の歴史であるとする思想を対置する。十六世紀以来、消えては現われ、やがてつぎの世紀には話題の中心となる「文明」と「自然」、ないしは「文明」と「原始」というこのパターンの変遷を論争の前後へ辿ることは、また別個の、しかし興味ある問題であろう。〉（赤木昭三、235-237 頁）

以上のように、赤木論文は、現在では入手が困難と思われる、ペローの十七世紀に刊行された四部にわたる著作『古代人と現代人との対比』（Perault, 1688, 1690, 1692 et 1697）から直接訳出する作業を通じて、ペローの立場を原典に即して明らかにしている。上の引用文の中の、かぎ括弧の中の部分は、全て赤木によるペローの原著からの邦訳に他ならない。

ベリーも、赤木ほど詳しくではないが、『古代人と現代人との対比』の内容を紹介したあと、ペローの議論は、まだ到底、進歩の理念を完全に具体化したものとはなりえていない、と断定している。ペローの関心は未来には向けられていない、とベリーはいう。彼は、ごく最近の知識の進歩にあまりにも強烈に印象づけられていて、これ以上の進歩を想像することはほとんど出来ないのである。彼は、自然はみずからの老年に達したと考えている。彼の展開している知識の進歩の理念は、まだ不完全なものであった、とベリーは結論づけている。（Bury, pp. 87-88.）

同じように、ペローの作品集を編纂したジルベール・ルージェーは、文学、美術、科学、生活の便利さなどの一切が、『古代人と現代人との対比』の著者のペローにとっては、ルイ十四世の治下で完成をみたと考えられていたの

である、と記している。(Perrault, 1967, Introduction, p. xi.)

人間の知識の絶えざる進歩という思想の確立は、したがって、「古代・現代論争」での現代派の輝ける論客であったペローにおいてはまだなされていなかった。進歩の理念の確立のためには、フォントネルの登場を待たなければならなかったのである。

### 第3章 フォントネルにおける進歩の理念の確立

フォントネルの生涯については、『啓蒙についてのブラックウエル・コンパニオン』に簡潔な記述があるので、それを借りることにしたい。

フォントネル、ベルナール・ル・ボヴィエ・ド (Fontenelle, Bernard le Bovier de 1657年2月11日ルーアン生まれ、1757年1月9日没) フランスの著作家。法律を学んで、しばらく法律家として活動したあと、アカデミー・フランセーズ会員に選出され (1691年)、アカデミー・フランセーズ書記となった (1699年)。彼の長い生涯の大半にわたって、パリの知的世界の指導的な人物の一人であり、『古代と現代についての余論』(1688年)によって、古代派に敵対する現代派の指導的な擁護者の一人となる。また、科学者たちについての彼の賞賛の演説 (1683年以後) と、『死者の対話』、『世界の複数性についての対話』(1683年以後) ならびに『奇跡の歴史』(1687年)によって、新しい科学の諸概念の普及者となった。(Yolton, ed., 1991, p. 167.)

なおフォントネルの『世界の複数性についての対話』の赤木昭三による訳書巻末の解説は、フォントネルの時代、生涯、作品についての簡にして要を得た紹介論文である。(フォントネル、赤木昭三訳、1992年、196頁以下)

このように、フォントネルの『古代と現代についての余論』(*Digression sur les Anciens et les Modernes*) は、「古代・現代論争」の中で、現代派を擁護する強力な理論的支柱となった。幸い、フォントネルのほとんどの著作

を網羅した全集が、パリで刊行中であり、『古代と現代についての余論』は、その第2巻に全文が収録されているので、原文を参照することが出来る。試みに、先ずその冒頭の部分を訳出する。

〈古代人と現代人のいずれが優位に立つかという問題の全ては、当然のことながら、かつて我らの原野にあった樹木が、今日の樹木よりもより大きかったか否かを知ることには帰着する。もし、より大きかった場合には、最近数世紀にわたり、誰も、ホメロスやプラトン、デモステネスと対等であることは出来ない。しかし、もし我々の樹木が、かつての樹木と同じ大きさであるならば、我々は、ホメロスやプラトン、デモステネスと対等であることが出来る。

このパラドックスを解明しよう。もし、古代人が、我々より以上の精神を有していたとすれば、そのことは従って、当時の脳が、より良い状態にあり、よりしっかりした、或いはより繊細な繊維によって形成されており、より多くの動物精気 (esprits animaux) に満たされていたということである。しかし、何のおかげで、当時の脳は、より良い状態にあったのであろうか。してみると、樹木も、より大きく、より美しかったということになるであろう。何故ならば、もし自然が、当時、より若々しく、より生気があったとするならば、樹木も人間の脳も同様に、この生気やこの若さを意識していたはずである。

古代人を賛美する人々は、彼らが次のように主張する時に、この事実に対し注意を払ってほしいものである。それは、彼らが我々に向って、(古代の)かの人々は良い趣味と理性との源泉であり、他の全ての人々を照らすように運命づけられている光明であり、そして、(古代の)かの人々を賛美するひとほどエスプリを有するひとということになるのであり、自然はあれらの偉大な独創的な人々を産出する力を使い果たしてしまった、と主張する時のことである。実際には、これらの人々は、我々に対して、あれらの偉大な独創

的な人々を、我々とは違う人種に仕立ててしまっているのであり、そして、物理学はこれらの美辞麗句とは一致しないのである。自然はみずからの両手の間に、常に同一であり続ける或種の練り土 (une certaine pâte) を持っていて、その練り土を、自然は千回もこねまわすのであり、その練り土を使って自然は、人間や動物や植物を形作るのである。そして、間違いなく自然は、プラトンも、デモステネスも、ホメロスも、現代の哲学者、現代の雄弁家、現代の詩人よりもより上質の材料で作った訳ではないし、より良く準備の出来た材料で作った訳でもない。私はここで、物質的な性質のものではない我々の精神の中に、これらの精神が脳との間に有する、両者を結合させるもの以外のものを認めはしない。この、両者を結合させるものは物質であり、そのさまざまな配合の違いによって、これらの精神の間にある全ての差異を産出するのである。〉 (Fontenelle, 1991, pp. 413-414.)

すでに、以上の冒頭部分に、自然の恒常性という重要な命題が出現している。これは、現代派の重要な論拠となった。もし、自然が老衰して老いさらばえてしまっているのならば、自然が若さに溢れていた古代に、自然が生み出した天才を生み出す力を、自然はすでに失ってしまっていることになる。自然はみずからの両手の間に、常に同一であり続ける或種の練り土を持っている、というのは、後で取り上げるパスカルの『真空論序説』にも共通する、おそらく当時はさかんに使われた議論の進め方だったのであろう。このあと、フォントネルは、一種の風土論を展開する。自然の恒常性という議論は、同じ土地、例えばフランスについては成り立ったとしても、フランスとは風土を異にする別の土地と、フランスとについては、自然の恒常性という議論は成り立たないのではないか、という、予想される反論に対して、あらかじめこの反論をしりぞけておくためである。

〈しかし、もし、全ての世紀の樹木が同じ大きさであったとしても、全ての国の樹木が同じ大きさである訳ではない。精神にとっての相違も同様であ

る。さまざまな観念は、あらゆる種類の風土で同じようになるのではない植物や花と同じである。おそらく、我々のフランスの土地は、エジプト人が行う推理にとって、彼らの棕櫚（しゅろ）の樹にとってと同程度に、不適合であるのかもしれない。そしてあまり遠くへ行かずとも、ここフランスでは、イタリアで育つ程にはたやすくは育たないオレンジの樹は、イタリアには、フランスには全く類似のものを我々が有していないような、或種の精神の展開があるということを、おそらく示している。物質的な世界の全ての部分の間にある連鎖と相互依存とによって、植物の中で認識される風土の違いは、脳にまで拡大されて、脳に何等かの影響を与えるのは、確かなことである。

さりながら、脳へのこの影響は、より小さく、感じられることがより少ない。なぜならば、芸術と文化は、より重くより強情な物質から出来ている土地に対してよりも、脳に対して、はるかにより多くのことをなし得るからである。同様に、ある国の思想は、植物よりも容易に他の国に移植される。そこで、我々の著作の中に、イタリアの天才を取り入れるのに、オレンジの樹を栽培する程の苦勞をしないであろう。

人々は通常、精神の間には顔つきの間以上の多様性がある、と断言しているように、私には思われる。私はこのことが、それ程確かだとは思わない。顔つきについては、お互いにしばしば見つめ合う結果、新しい類似性が獲得される、ということは全くない。ところが、精神は、共通して有する通商貿易によって、新しい類似性を獲得する。同様に、本来、顔つきと同じようにさまざまである精神は、それほどは違わないという結果になる。

精神が相互に影響して形成し合うことの容易さは、人々が彼らの風土から引き出す原初の精神を保存しないようになるという作用をする。ギリシャの書物を読むことは、我々がギリシャ人としか結婚しないのと、割合でいえば同じ効果を、我々の中につくり出す。このように頻繁な結びつきによって、ギリシャの血とフランスの血が変化し、両国民に特有の顔つきの様子が少し

変わるのは、確かなことである。

さらに、どの風土が精神に最も有利であるかは判断出来ず、風土は明らかに相互に相殺し合う有利な点と不利な点を持っており、また、それ自体によってより多くの機敏さを与えるであろう風土は、より少ない正義を与えるであろうし、その他の事柄についても同様であるから、次の結論が生ずる。それは、精神がそれ以外の点では平等に陶冶されていると仮定すれば、風土の違いは無と見なされる訳にはいかない、という結論である。だがせいぜいのところ、熱帯や両氷河地帯は科学にあまり適していない、と考えることが出来る程度であろう。現在までのところ、科学は、一方の側ではエジプトやモリタニアを、他方の側ではスウェーデンを全く越えてはいかなかった。科学が、アトラス山とバルト海との間にとどまったのは、おそらく偶然によるものではなかったであろう。それが、自然が科学に課した限界点であるのかどうかは分らないし、何時の日にか、ラップ人や黒人の偉大な作家を経験することが出来るかどうか分らない。

それはともあれ、私には、これで古代人と現代人の大問題が解決したと思われる。諸世紀は、人間の間に、いかなる自然による違いをも設定しなかった。ギリシャやイタリアの風土とフランスの風土は、ギリシャ人やローマ人と我々との間に、何等かの知覚可能な違いを設定するのには似過ぎてゐる。もし設定しても、それは極めてたやすく消される。そして最後に、その違いは我々に有利に働かないのと同じ程度に、ギリシャ人やローマ人にも有利には働かない。従って、古代人も現代人も、ギリシャ人やローマ人も我々も、完全に条件は同じである。

私は、この推論が全世界の人々にとって説得的であるとは言わない。もし、私が、雄弁術の偉大な表現法を使って、現代人にとっての名誉となる歴史の諸特質を、古代人にとっての名誉となる歴史の諸特質に対置させ、一方に名誉となる文章を、他方に名誉となる文章に対置させたとすれば、また、もし、

私が、私たちを無知で浅薄な精神だとして扱う人々を頑固な学者として扱ったとすれば、そしてまた、文学者の間で確立された法律に従って、私が古代の党派の人々に不法行為に報いるに不法行為をもってしたとするならば、おそらく人々は私の論証をより高く評価したことであろう。しかし、私には、事柄をこのやり方で扱うことは、いつまでたっても終わらないということになると思われた。そして、美しい雄弁が双方の側でさかんに交わされたあとで、人々は、ちっとも前進がなかったのを知って全く驚いてしまうということになると思われた。私は、最も手っ取り早いのは、これらの全てについて少し物理学に相談してみることでと考えた。物理学は、雄弁術が限り無く広げてしまった論争の多くを要約する秘密の術を持っている。

例えば、ここでは、古代人と我々の間にある自然の平等性を認めた以上は、何の困難ももはや残らない。人々は、全ての違いは、それが何であれ、時、政府、一般的な情勢などの外的な事情によって引き起こされたに違いない、ということをはっきり認める。

古代人は全てのことを発明した。古代派が得意がるのはこの点についてである。従って、古代人は我々よりもはるかに多くのエスプリを持っていたのであろうか。全然そうではない。けれども、彼らは我々に先行した。私はむしろ、人々が古代人を、彼らが我々の川の水を最初に飲んだということについて、褒めそやすのを好む。また、人々が我々を、我々は彼ら古代人の飲んだ残りしか飲んでいないということについて、軽んじるのを好む。もし我々が、彼らの立場に置かれたとすれば、我々は発明をしたであろう。もし彼らが、我々の立場に置かれたとすれば、彼らは、すでに発明されているのを彼らが見出した事柄に、追加をしたことだろう。特別不思議なことは無いのだ。

私はここで、偶然が生み出した発明のことを述べているのではない。もし偶然が欲するなら、偶然は世界中で最も不器用な人に、発明についての名誉

を与えることが出来よう。私は、何等かの瞑想と何等かの精神の努力を必要とした人々についてのみ述べている。この種の人々の中で最も野性的な人々が、特別の天才に限られていたのは確かである。そして、アルキメデスのような人が世界の幼年期になし得たであろう全ては、鋤を発明することであつたであろう。他の世紀の中に置かれたアルキメデスは、もしそれが作り話でなければ、ローマ人の船を鏡で焼くのである。》(Ibid., pp. 414-417.)

このあとに続くのは、最初に発明するのと、あとからその発明を土台にして、その上に何事かを付け加えるのと、どちらが難しいか、という議論である。初め、古代派の主張に賛成するかのような語り口を見せながら、結局、現代派の主張を支援する方向に議論が運ばれていく。古代派に対しても、公平な態度を示すように見せながら、何時の間にか、現代派を応援するようになっていく。しかし、この、或程度の公平さと、ファナティックにならない、一見淡淡とした議論の進め方が、フォントネルのこの作品の高い評価を確立するのに役立ったと思われる。しかし、その公平さは、古代人の冒した多くの誤りが、現代人に同じ誤りをする無駄を省いてくれる、というような、古代人の努力をたたえているように見せながら、結局は現代においてこそ、より正確な認識が確立されているのである、という結論に導いている。以下に示されているような、現代人がより正確な認識に到達するためには、プラトンの「アイデア」、ピタゴラスの「数」、アリストテレスの「質」(qualité,ギリシャ語ではポイオテース *poiotes*)を試みる必要であった、という考え方は、プラトンのアイデア説も、ピタゴラスの数学も、アリストテレスの形相説も、全て誤りであったという意味になり、解釈の仕方によっては、ずいぶん大胆な、あるいはさらに過激な発言であるとも考えられる。フォントネルのこのような自信に満ちた発言を支えていたのは、彼が大いに共感を示しているデカルトの方法論であった。彼は、デカルトの哲学は誤っているとして拒否するが、推理に關してのデカルトの方法論は、全面的に受け入れ、



その画期的な意義を強調している。デカルトの哲学とフォントネルとの複雑な関係については、赤木の大著に詳論されていることを付け加えておきたい。(赤木昭三, 1993 年, 71-87 頁)

フォントネルは続けて論じている。

〈特別の、そして素晴らしい事柄を語ろうとする人は、現代人の栄光のために、精神は最初の発明のためには大した努力を必要とせず、自然自身が我々を発明に導くように思われるが、その発明に何かを付け加えるためにはより多くの努力が必要であり、また、すでに人々が付け加えてしまっていればいる程、それだけ多くの努力が必要になる、と主張するであろう。何故ならば、素材はすでにより窮められていて、発見すべく残されている事柄は、より目につきにくくなっているからである。おそらく、古代人を崇拜する人々は、このように良い推論を見のがさないであろう。もしこの推論が彼らの党派に味方するのならば。しかし、私は、この推論は手堅いものではないことを正直に認める。

最初の発見に付け加えるためには、しばしば、最初の発見をする以上の精神の努力が必要であるというのは事実である。しかしまた、この努力については、はるかに多くの容易さも感じられる。人々はすでに、目の前にあるこれらの同じ諸々の発見によって啓発された精神を所有している。我々は、我々が蓄積によって所有している諸見解に付け加えられる、他者から借りた諸見解を所有することになる。そして、もし我々が、最初の発明者を凌駕するとすれば、この最初の発明者を凌駕するのに我々の手助けをしてくれたのは、最初の発明者自身である。このように、最初の発明者はつねに、我々の仕事に寄与している。そして、最初の発明者が自分に属するものを取りかえしてしまえば、我々には、最初の発明者に属する以上のものは何も残らなくなる。

私は、この主題についての私の公平さを押し進めて、古代人に対しても同じく、彼らが有した限り無く多くの誤った見解や、彼らの行った限り無く多

くの誤った推論、彼らが述べた限り無く多くの愚かな話を考慮に入れる。それが何であれ何らかの題材について、一挙に道理のあることには到達することは我々には全く許されていない、というのが、我々の状況である。それに到達するまでに我々は長い間迷わなければならない。そして、さまざまな種類の誤謬とさまざまな程度の筋違いを通過しなければならない。一見したところでは、自然の全ての動きは、身体の姿や運動の中に存するというところに気がつくのは、つねにたやすいことであつたはずである。けれども、そこに到達するまでに、プラトンのアイデア、ピタゴラスの数、アリストテレスの質を試みるが必要であつた。そして、これら全てが誤りであると認められて、人々は正しい体系を把握するに至らしめられたのである。私は、至らしめられた、という。なぜならば、それ以外の言い方はないからである。そして、人々は可能な限り長い間にわたって、正しい体系を把握することに抵抗してきたように見える。我々は、あり得るかぎりの誤った考えの大部分を探究し尽くして我々には残しておかなかったことに対して、古代人から恩恵を蒙っている。古代人が誤りや無知に対して支払った貢ぎの金を支払うことが、絶対に必要であつた。そして、我々は、我々にこの貢ぎの金を支払うのを免除してくれた人々に対する感謝を怠ってはならない。それについて、もしすでに多くの愚かな話が言われていなければ、そして、もしすでに多くの愚かな話が我々のもとから、いうなればあらかじめ取り除けられていなければ、どれほど多くの愚かな話を我々が言ったか分らないほどであるところの、さまざまな題材についても同様である。けれども、時々、これらの愚かな話を蒸し返す現代人がいる。おそらくそれは、これらの愚かな話が、まだそうあるべきほどには語られていないが故である。このように、古代人の見解によって、そして古代人の誤りによってさえも啓発されているのであるから、我々が古代人を凌駕したとしても驚くには当たらない。古代人と対等に比肩する以上のことをしないとすれば、我々は古代人よりもはるかに劣悪な素質を有

することになるであろう。その際には、我々がほとんど、古代人とは同等の人間ではない、ということではなければならないということになってしまうであろう。

それはさておき、現代人がつねに古代人の上をゆくことが出来るためには、事物がそれを許すようなものであることが必要である。雄弁術と詩とは、他の芸術と比較して、かなり限られた数の見方しか必要としない。そして、雄弁術と詩とは、主に想像力の機敏さに依存する。さて、人々は、数世紀の間には僅かな数の見方しか集めることが出来ない。そして、想像力の機敏さは、それが達成し得る全ての完成度を持つに至るためには、長い時期にわたる経験を必要とはしないし、膨大な量の規則をも必要とはしない。しかし、物理学、医学、数学は、無数の見方から構成されており、極端にゆっくりとしか完成度に達することのない、しかも日々完成度を高めつつある推理の正しさに依存している。これらの学問が、偶然だけが生み出すことが出来、偶然が指定された地点には導かない経験に助けられることさえ、しばしば必要とされる。これら全ては、終りがまったく無いし、最後の物理学者や数学者が、当然、最も有能であるに違いないということは、明らかである。

事実、哲学の中で主要な眼目であり、そこから全てにひろがること、私は推理のやり方といたいのだが、それは、今世紀になって極端に完成度を高めた。私が行おうとしている言明に大多数の人々が共鳴しないであろうという強い疑いを私は持っている。私はこの言明を、推理 (raisonnements) に精通している人々のために行うであろう。そして、私は、真理の利益のために、その数はたしかに軽視すべきではないものであるところの他者全員の批判に、みずからをさらすというのは、勇気を持つことであると自負するものである。どのような題材についてであれ、古代人は、かなりの程度、完全な完成度において推論をしない傾向がある。しばしば、価値の乏しい便宜とか、僅かな類似とか、あまりしっかりしたものではない精神の遊びとか、曖昧で

混乱した議論が、彼らの間では証拠として通用している。また、証明することは、彼らにとって全く無価値の事柄である。しかし、古代人が遊び半分で証明するであろう事柄は、今、気の毒な現代人に、大変な苦しみをもたらすであろう。なぜならば、推理について、どれほどの厳密さが求められることか。人々は、推理が理解しやすいことを求め、正しいことを求め、結論を出すことを求める。人々は、観念についても語句についても、最小の曖昧さをも見分ける意地悪さを持つであろう。人々は、世界の中の最も気の利いた事柄についても、もしそれが実際にうまくいかなければ、長期にわたってそれを非難するであろう。デカルト氏以前には、人々は、もっと気楽に推理をしていた。過去の世紀は、この人物を有しなくて大いに幸せである。私にはそう思われるのだが、推論のこの新しい方法 (*cette nouvelle méthode de raisonner*) をもたらしたのはデカルトである。彼のこの新しい方法は、彼の哲学それ自体よりもより高く評価すべきものである。彼の哲学の大部分は、彼が我々に教えた適切な規則に従えば、誤っているか或いは極めて不確かなことが明らかになる。最後に、現在までほとんど知られていなかった正確さと正しさが、物理学や形而上学についての我々の有する良き諸著作の中で支配的であるばかりでなく、宗教、道德、批評についての我々の有する良き諸著作の中でも支配的である。

私は、これらの正確さと正しさが、さらに遠くに及ぶであろうと強く信じてさえいる。我々の最善の諸々の書物の中で、何らかの推理が、さらに古代的なものにも入り込まない訳にはいかない。けれども、我々はいつかは古代人になる。そして、我々の子孫が、彼らの側で、主に推理のやり方について我々を矯正し、我々を凌駕するのは、大いに正しいことではないだろうか。推理のやり方は、独立の学問であり、しかも最も難しく、また全ての学問の中で最も未開拓なのである。》(Ibid., pp. 417-421.)

このあとしばらく、古代の雄弁術と詩とについて、ギリシャとローマのい

ずれが優るか、という議論が続き、雄弁術ではローマのキケロがギリシャのデモステネスに、詩ではローマのヴィルギリウスがギリシャのテオクリトスやホメロスに、歴史ではローマのティトゥス・リヴィウスやタキツスがギリシャの全ての歴史家に優ると断定している。そして、雄弁術と詩とについてローマがギリシャに優っているのは、古代ローマは、古代ギリシャに対しては現代であったからだ、と論じている。そして、古代ローマに続く時代は蛮族の侵入などで学問や芸術が衰えた事実を認めた上で古代と現代の比較論の核心に迫る命題が、次のような形で提示される。

〈アウグストウスの世紀に続いた、またそれに先行した野蛮な諸世紀は、古代人の党派に、最もすぐれているという外見を呈する彼らの推理の全てを供給する。彼らの言うには、そこから、かの諸世紀においては無知はあれ程厚く、あれ程深い、という結果が生ずるのである、と。それはすなわち、人々がそこではもはやギリシャ語もラテン語も知らなかった、ということである、と。だがしかし、人々が目の前にこれらのすぐれた規範を再び置くに至った瞬間から、理性と良き趣味が再生するのが見られた、と。これは本当のことであって、何ものをも証明していない。もし、科学や美文学の良き発端を有したであろうひとりの人間が、彼に科学や美文学を一挙に忘れさせてしまうような病気を経験するに至ったとするならば、そのことは、彼が科学や美文学について無能力となったということであろうか。そうではない。彼は、彼が欲するであろう時に、科学や美文学を、最初の要素から再び始めることによって、取り戻すことが出来るであろう。もし、何かの薬が、彼に記憶を一挙に取り戻させるならば、苦勞を免ぜられることとなろう。彼は、彼が知っていた全てを自分が知っているのを感じるであろう。そして、続けるためには、彼がそこで終っていたであろうところからやり直せしさえすればそれでよいであろう。古代人の学識は、先行した諸世紀の無知と野蛮さを追放した。私は、このことを信ずる。古代人の学識は、我々がそれを取り戻すのに長く

かかったであろう、しかしながら、我々が結局の所はギリシャ人やローマ人の助けが無くとも、もし我々が良く研究していたならば結局のところは取り戻していたであろうところの、真と美についての諸理念を、一挙に我々に取り戻させる。古代人ですら、それらを獲得する前には、かなり長く模索したのである。

我々がなし得る、全ての世紀の人間をひとりの人間にたとえる直喩 (comparaison) は、古代人と現代人をめぐる我々の問題の全てに及ぶことが可能である。磨き上げられた良き精神は、いわば、先行する全ての世紀の全精神から構成されている。このように、世界の始まりから今日まで生きてきたこの人間は、生活の最も差し迫った必要に没頭していただけであった、その幼年時代、詩や雄弁術のような想像力の事柄においてかなりの成功を収めた、そして推理することさえ開始したが、しかし、堅実さよりは寧ろ恐怖をもってそれを行った青年時代を有した。彼は今や壮年の時期にあり、ここでは、彼は今まで以上に力強く推理し、今まで以上の知識 (lumière) を持っている。しかし、もし戦争の情熱が彼の心を長らくとらえることがなかったならば、そしてそれが彼に、そこに彼が結局立ち戻った科学に対する軽視を与えることがなかったならば、彼はもっと先に進んでいたことであろう。

このようにうまい工合にいつている直喩を、最後まで押し進めることが出来ないのは残念なことである。しかし、私は、この人間が全く老廃の時期を迎えないであろうとを認めざるを得ない。彼は、常に同じように、青年時代に特有であった事柄をなす能力を持っているであろう。そして、彼は、壮年時代にふさわしい事柄をなす能力を、時とともに益々身につけるに至るであろう。それはすなわち、風論 (allégoire) を使うのを止めれば、人間は決して退化せず、相次いで生ずるであろう、あらゆる良き精神の正しい諸見解が、常にひとつづつ加わっていく、ということなのである。》(Ibid., pp. 425-426.)

このような、長い時代にわたる人間精神の成長を、ひとりの人間の精神の成長になぞらえる考え方は、その根拠としての自然の恒常性についての、先に引用した「自然はみずからの両手の間に、常に同一であり続ける或種の練り土を持っていて、その練り土を、自然は千回もこねまわすのであり、その練り土を使って自然は、人間や動物や植物を形作るのである」という個所に示されている考え方とともに、パスカルの『真空論序説』にも見出される。このことは、赤木が、「進歩の思想形成についての一考察」で指摘している。赤木は、さらに、パスカルの類似する一節をフォントネルはおそらく知らなかった、と断定し、このことは、『真空論序説』の一節との類似性以上に注目すべきことである、と述べている。(赤木、1975年、232頁)そして、赤木は次のように付け加えている。

〈科学はこの半世紀の間に著しい発展を遂げたばかりか、知識人やさらには社交界の人士の間にまで流行的熱中を生んだ。科学のアマチュアにすぎないフォントネルが先駆者パスカルとは独立にこの定式を思いついたということは、このような科学の発展と普及によって、知識における進歩が一般人にも理解され、受け入れられるようになったという事実を何よりも雄弁に物語るものであろう。〉(赤木、232-233頁)

#### 第4章 パスカルの『真空論序説』

パスカルの『真空論序説』(Préface pour le traité du vide)は、不完全な断片の形でしか伝わっていない。パスカル全集の編纂者ジャック・シュヴァリエの序言によれば、今日我々が目にすることの出来る『真空論序説』は、パスカルが執筆を計画しながら執筆に至らなかった論文『真空論』の序文として書かれ、P.ゲリエ(P. Guerrier)なる人物が極めて不完全な、脱漏だらけの形で書き写したものである。執筆は1647年末と推定されるが、刊行

されたのは、ボシュエの編集した5巻本のパスカル全集の『パンセ』の冒頭においてであり、1779年のことである。(Pascal, 1954, p. xxv. p. 529.) 赤木が、パスカルの『真空論序説』をフォントネルはおそらく知らなかった、と断定しているのは、赤木は典拠を挙げてはいないけれども、このあたりの事情を踏まえてのことと考えられる。

それでは、パスカルはここで、どのようなことを述べているのであろうか。中央公論社世界の思想二十九巻『パスカル』に収録された由木康訳とフランス語の原文とによりながら、そのあらましを辿ってみることにする。

『真空論序説』は、次の文章で始まっている。

〈人々が古代に対していただく尊敬は、それがそれほど強調されてはならない問題においてさえ、今日、非常な程度に達し、古代のあらゆる思想を神託と見なし、不分明なことまで秘義としているほどである。そのため、人々は危険なしに新説を唱えることができず、ある著者の原文を引用するだけで、最も強力な論拠を破壊することができるほどである(以下欠落)〉(パスカル, 1978年, 451頁, Pascal, 1953, p. 530.)

このあと、パスカルは、神学に関する事柄については、聖書が権威となるが、感覚や推理(raisonnement, フォントネルの用語と同じ)のもとにある問題については、権威は無用であり、それらは理性(raison)によって知られるべきもので、そこでは理性が支配する、と明言する。幾何学や、数学、音楽、物理学、医学、建築および経験と推理に従う全ての学問は、「完全になるためには増し加えられなければならない。」(452頁, p. 531)したがって、自然学的問題(matières physiques)においては、推理や実験のかわりに権威を持ち出すのは誤りである。古代人の学説をこれらの問題に、権威として持ち出すのは、止めなければならない。(パスカル, 453頁, Pascal, p. 531)

ついでパスカルはいう。



〈自然の秘密は隠されている。自然はつねに活動しているけれども、人々はつねにその作用を発見しはしない。時間が時代から時代にわたってそれを開示する。自然は、それ自身としてはつねに同じであるが、つねに同じようには知られない。〉

その知識をわれわれに与える実験はたえず増加する。そして実験は自然学の唯一の原理であるから、帰結もそれにともなって増加する。〉（パスカル、434 頁、Pascal, p. 532.）

であるから、古代人（anciens）が与えてくれた知識は、我々が僅かな努力でそれを凌駕するための段階（degrés）として、いわば踏み台として役立っているのであり、古代人に反論するのを犯罪と見なすようなことは、おかしいことである、とパスカルはいう。（パスカル、455 頁。Pascal, p. 533.）パスカルは次いで、このようなやり方は、人間の理性を動物の本能と同じように低く位置づけるに等しい、と断じて次のように議論を展開する。

〈これは人間の理性を不当に取り扱い、それを動物の本能と同列に置くことではあるまいか。なぜなら、そうすることによって、本能はつねに同じ状態にとどまっているのに、理性の結果はたえず増大するという、両者の主要な差異を除去してしまうからである。蜜蜂の巣は千年前も今日と同様に正確に計算され、それらのおのおのは最初の時も最近の時と同様に厳密な六角形を形づくっている。動物がこのふしぎな作用によって作りだすものは、みな同じである。必要が彼らに迫るに従って、自然が彼らに教えこむ。だが、このひよわい教えは、それを受ける機会になった必要がなくなるとともに失われる。彼らは勉強せずにそれを受けたので、それを保存する幸福を持たないのである。そして、それは与えられるたびごとに、彼らには新しい。なぜかといえば、自然は制限された完全の秩序に動物を置くことのみを目的にしたので、彼らが衰滅してしまうのを恐れて、いつも同じ必要なだけの教えをこれに吹きこみ、また彼らが指定された制限を超えるのを恐れて、その教えに

何物かを加えることを許さなかったのである。無限のためにのみ生みだされた人間は、これと同じではない。彼はその生涯の初期においては、無知のうちにある。だが、たえずみづからを教育して進歩していく。なぜなら、彼は自分自身の経験からばかりでなく、先人の経験からも利益を引き出すからである。それというのは、彼は一度得た知識をつねに自分の記憶のうちにとどめているし、古人（*anciens*、本論文の文脈では古代人）の知識も遺された書物によってつねに彼の前にあるからである。また彼はこれらの知識を保存しているので、それらをたやすく増加することもできる。そういうわけで、人類（*hommes*）は今、古代の哲学者（*anciens philosophes*）たちが現代まで生き残っていたとしたら、彼らの持っていた知識に、彼らの研究が長い世紀の助けによって得たであろうものを付加したと思われるような状態にあるのである。そこで格別な特権によって、一人一人の人間が日々に学問に進歩する（*s'avance de jour en jour*）のみでなく、全体としての人類（*tous les hommes ensemble*）が、宇宙が老いていくにつれてたえず進歩するのである（*y font un continuel progrès à mesure que l'univers vieillit*）。それは、同じことが、各人の異なった時期に起こるように、人類の経歴のうちに起こるからである。そういうわけで、長い世紀の過ぎゆくあいだにおける人類の経歴は、つねに生存し、たえず学んでいく一個の人と同様に见なすべきである（*De sorte que la suite des hommes, pendant le cours de tant de siècles, doit être considérée comme un même homme qui subsiste toujours et qui apprend continuellement*）。そこからわれわれが悟るのは、われわれが古代の哲学者たちにおいてその古代性（*l'antiquité*）を尊敬するのはいかに不当であるかということである。）（パスカル、455-456頁。Pascal, pp. 533-534.）

それはなぜか。パスカルによれば、彼が「この普遍的人間（*cet homme universel*）」と呼ぶ（由木康訳では「宇宙人」）、ここで想定されているたえ

ず進歩する一個の人間について、その老年（vieillesse）とは、幼年時代（enfance）から最も遠く離れた時代なのであるから、我々が古代人と呼んでいる人々は、老人ではなく、実は人類の幼年時代に位置した人々であったからである。彼らは、全てについてまったく新人（véritablement nouveaux）であった。（456 頁。p.534.）

フォントネルの文章を、パスカルのそれと並べてみると、実に多くの類似点に気付く。理性による推理の重視はもとより、たえず成長する一人の人間という比喩、古代人は老いていたのではなく、現代人の「我々」のほうが円熟を重ねているという議論、人類の知識は今が絶頂ではなく、限り無く前進を続けるという見方など、両者が全く独立に、ほぼ同じ論理を使い、同じ論旨を展開していることは、まさに驚くべきものがある。ただし、フォントネルが、「古代・現代論争」を強烈に意識しながら、論を進めたのに対して、パスカルのほうは、「古代・現代論争」とうよりは、古代ギリシャのアリストテレスの哲学、とりわけアリストテレスの自然哲学を権威として認めるのを拒否するという態度が根本にあると考えられる。「古代・現代論争」そのものは、ペロオが1687年1月にアカデミー・フランセーズで発表した『ルイ大王の世紀について』によって本格化したのであり、パスカルが『真空論序説』を執筆したのは、先に挙げたシュヴァリエの考証に従えば1647年であった。1623年に生まれたパスカルは、1662年に39歳の若さで世を去っていて、ペロオの『ルイ大王の世紀について』に始まる「古代・現代論争」の本格化を体験することはなかった。パスカルが、彼の生まれる前にイタリアでタッソーニが投じた問題提起について知っていたかどうかは、パスカル研究者の考証を得なければ答えられない。いずれにしても、フォントネルの『古代と現代についての余論』と、パスカルの『真空論序説』とは、ヨーロッパにおける進歩の理念の確立を告げた、記念碑というべきであろう。そして、『真空論序説』が、当時は刊行されることのなかったのに対して、『古代と現

代についての余論』は、1688年に刊行され大きな反響を呼び、「古代・現代論争」で現代派が優勢を占める上に貢献したのであるから、その影響力、作用という点で、比較にならぬ程の違いがあった、というべきであろう。

## 第5章 進歩の理念のその後と現在

本論文では、近代ヨーロッパにおける進歩の理念について、その成立の時期に焦点を合わせ、「古代・現代論争」との関連でペロオとフォントネルを中心の主題とし、フォントネルとパスカルとの対比をも試みた。思想史の系譜としては、このあと、進歩の理念は、アベ・ド・サン＝ピエール、テュルゴ、コンドルセに受け継がれ、さらにコントによって十九世紀へと導入された。(岩坪、283頁以下) 第一次世界大戦勃発まで、進歩の理念はヨーロッパ、特に西欧世界に広く普及して、いわば自明の事柄として常識化してゆく。第一次世界大戦の中で、ヨーロッパ諸列強が相互に総力戦体制を敷いて戦った事実は、自明の事柄とされていた進歩の理念に初めて翳りを生じさせ、「西欧の危機」というようなことがいわれるようになった。しかし、例えばアメリカでは、進歩の理念は、第一次世界大戦によって揺らぐようなことはなかった。第二次世界大戦も同様に、アメリカ人の進歩の理念を揺るがすものではなかった。

進歩の理念への、いわばこのような信仰が、世界全体で揺らぎ始めたのは、むしろ比較的最近のこのように思われる。「進歩の理念の文学的イメージ：ひとつの理念の運命」という表題の論文のなかで、カナダ、ヴィクトリア大学の英文学教授で、国際時間論研究学会の会長(1989-92年)をつとめたサミュエル・L. メイシーは、一九六〇年代半ばになって初めて、進歩、特に技術による物質的進歩に、疑問が投げかけられるに至ったことを指摘している。(Macey, 1986, p. 93, p. 101.) 環境破壊を許すまいというような運動

は、この疑問のひとつの具体化であろう。

しかし、メイシーは、『進歩の力学：時，方法，および尺度』という彼の  
大著の中で、もうひとつ、重要かつ辛らつな指摘を忘れていない。それは、  
「人々が、益々多くの物質的財貨を求め、しかも、かれらの労働や生活の合  
理化について、また同時に、地球の時とともに益々ひどくなる汚染について、  
ひどく苦情をいいたてる時」、そこにはひとつのパラドックスが成立してい  
ることになる、という指摘である。(Ibid, p. xiii.) メイシーの論文の該当の  
箇所は、この論文の冒頭に見出される。この部分は、「古代・現代論争」に  
も言及していて、示唆に富んでいる。試みに、以下に引用しておきたい。

〈西欧世界 (Western world) の出身で、四十歳以上の人々は、その生涯  
のかなりの部分を、進歩の理念が徳 (virtue) と同一視されている社会の中  
で過ごしてきた。進歩は、明らかに善いものであった。もちろん、進歩の理  
念について、全く問題が無い訳ではないであろうという兆候も、早くから現  
れてはいた。それは例えば、物質的な進歩についての世紀末の幻滅や、第一  
次世界大戦後の、進歩への絶望である。しかしながら、1960 年代半ばになっ  
て初めて、進歩、それももっと特定していえば技術による物質的進歩に、ほ  
ぼ三百年にわたってそういうことのなかった程の規模で、疑問が投げかけら  
れるに至った。進歩の理念についての疑問視は、我々の許に、我々の生涯の、  
これからの残り全般にわたって我々を苦しめるであろうディレンマを結果と  
してもたらすのであるから、我々は、現代派と古代派の間の争いに象徴化さ  
れたような、この理念それ自体が、どのようにして我々の文明の一部となっ  
たかを理解することから、必ずや恩恵を蒙るに違いない。〉 (Macey, 1986, p.  
93-94.)

この後、メイシーは、「古代・現代論争」について、この論争は、文学上  
の論争の形態をとってはいたが、実は近代 (当時でいえば現代) 科学と古代  
科学の間の論争の、時期のずれた反映に過ぎなかった、と断言するジョーン

ズの著作 (Jones, 1965, pp. 267, 342, *passim*) を引用し、これに賛意を表している。そして、ガリレオ、トリチェリ、ボイル、ニュートンらが、実験にもとづく方法が、アリストテレスや彼に追隨した思弁的な方法に優っている事実を証明し、アリストテレスの権威は、十七世紀第三四半期までに、近代科学の方法によって完全に覆されたと述べたあと、ただし、文学の領域では、アリストテレスの『詩学』の権威が、さらに一世紀余命を保った事実をも指摘している。(Ibid., p. 94.)

しかし、進歩の理念の現在における位置を考える上で、より興味深いのは、メイシーの論文の結論の部分である。ここで彼は、西欧世界の大部分の人々が、十七世紀イギリスの王政復古 (Restoration) の時代であったならば地方の大地主の「スクワイアー (squire)」だけが享受していたであろうような高い生活水準を享受出来ることを期待していると述べている。(Ibid., p. 101.) このあと、この期待が西欧世界の特権として、西欧世界に限定されなくなる時に生ずる事態について、暗い予想を展開する。

〈我々が西欧において今期待していることを、西欧以外の世界は五十年以内に見習おうと企てている。その時までには、世界の人口は、ほぼ百億に達すると予想されている。これは、王政復古の時代の二十倍である。我々が今、西欧世界で享受しているのと同じ物質面での水準を、もし全ての人が要求するならば、各人が、王政復古の時代の平均の個人の物質面での水準の少なくとも五十倍を要求していることになるであろう。もし、人口と平均の個人の要求の増加が許容されるならば、我々は、五十年間に、生産されるあらゆる種類の財貨への世界の要求は、1660年の千倍になると予想しても不当ではない。

物質面での進歩から生ずる問題の大きさは、進歩の理念を最も熱心に信奉している人々でさえ、人口と消費のいずれか、或いはその両方を制限しなければならないという、緊急の必要性を感じない訳にはいかない程のものである

る。進歩の理念は、我々が、聖書の言葉に従って、我々自身が生めよ増やせよを実行し始めたばかりでなく、我々の物質面での所有を増やし始めた時代以来、一貫して我々に良く奉仕してきた。実際、1660年までに、キリストの時代から数えると倍になって、五億までに増えるにとどまっていた世界の人口は、過去三百年間にさらに八倍に増えた。けれども、人口の増加と物質面での消費の、予想される加速化は、今や、より大であると同時により切迫している。無制限な進歩が我々を、発がん物質によって殺すのか、汚染された水によって殺すのか、核のホロコустによって殺すのか、その間の違いは、それほど重要ではない。終末の感覚と、それに対処する合意の欠如は、十分に明白である。今日、我々は、我々のハルマゲドンをつくり出すためには、神のような存在を必要としない。

何が結論となりうるか。私がこの論文を書き始めたとき、私は、或種の警告のシグナルはあったが、1960年代半ばになって初めて、進歩、それももっと特定していえば技術による物質的進歩に、ほぼ三百年にわたってそういうことのなかった程の規模で、疑問が投げかけられるに至った、と述べた。当時、進歩を疑問視した若い人々の多くは、今、当時程大声で言い立てることはなくなった。おそらく彼らは、彼ら自身の物質面での快適さを代価として犠牲にすることなしには、進歩は逆転されえない、という事実を理解したのであろう。にもかかわらず、そして、すでに生じたことの結果として、人々は今や、エネルギーの維持、環境の制御、人口のゼロ成長といった理念を、より意識するようになっている。これらの全ては、無制限な物質的進歩の理念の逆転にかかわらせることの出来るものである。

私は、この論文の初めに、我々の中の四十歳以上の人々は、その生涯のかなりの部分を、進歩の理念が徳と同一視されている世界の中で過ごしてきた、と述べた。物質面での幸福への我々の欲望へ、我々に、進歩の理念をほとんどいかなる代価を支払ってでも支持することを、既存利益たらしめた。三百

年前に行われた古代派と現代派間の論争を、ひっくり返した奇妙な形で、勝利した現代派の子孫である我々は、今や、進歩の理念を維持することを望む新しい古代派になってしまった。アンシャン・レジームの時期の貴族たちのように、我々は、洪水が起こるのは我々の死後であってほしいと願っている。しかし、我々は、その生命がより大きな危険にさらされている新しい現代派であるところの我々よりも若い世代が、それがどのような姿になるのか、我々には描くことが出来ない世界秩序と制御との新しい理念を信奉するであろうことを、理解してやらなければならない。〉(Ibid., pp. 101-102.; Cf. Miyake, 1996, p. 224.)

メイシーは、このように、現代における進歩の理念の行きづまりを、終末論に似たトーンで描いている。耳を傾けるべき、そして豊かな学殖に裏付けられた発言である。しかし、進歩の理念それ自体が、終末論的な要因を内蔵している事実にも注目する必要がある。というのは、例えばコンドルセが想定した人間精神進歩の諸段階の最後に来る第十段階は、彼の遺著『人間精神進歩史』の中で、第十期「人間精神の未来の進歩」として描かれているが、人類の進歩の究極に位置するユートピアとしてのこの第十期は、聖書の「ダニエル書」や「ヨハネ黙示録」に源を発する千年王国の思想を想起させるからである。(コンドルセ、第一部、247頁以下) コンドルセの第十期は、ヘーゲルやコジェーヴ、それを受け継いだフランシス・フクヤマの「歴史の終り」とも似通っている。(Cf. Maurer, 1965) 終末論と千年王国の思想については、別に報告したので、ここではこれ以上立ち入らないことにする。(Miyake, 1997 B)

メイシーと同様の考え方が、より明瞭な形で、アメリカの歴史学者の元ロチェスター大学史学科教授クリストファー・ラッシュ (1932-94) によって、いわば現代への彼の遺言として表明されている。アメリカの、最も発言力のある歴史学者の一人であったラッシュが、註をつけるいとまもなく亡くなっ



た最後の論文「制限の時代」が、フランシス・フクヤマのあまりにも有名な論文「歴史の終り？」(邦訳の表題は「歴史は終わったのか?」)に触発されて成立した論文集である『歴史と進歩の理念』の巻末に加えられている事実は、この論文集の表題と思いあわせるとき、何かを示唆しているように感じられる。ラッシュはここで、「地球のエコロジーは、もはや生産力の無限の拡大を維持出来ないことの、遅ればせながらの発見は、進歩への信仰に最終的な打撃を与えるものである」(Lasch, p. 230.)と断言している。この論文について詳論することは避けたいが、人類の未来に対して、ほぼメイシーと同じような予測をしたあと、ラッシュが制限(limit)のすすめとして展開している議論は、無限の進歩の幻想を捨てて、いわば足るを知る生活に徹せよ、というものであって、どこか東洋的な響きさえ感じられる。(ラッシュ, 1997年, 「訳者あとがき」参照)

以上述べてきたことによって、進歩の理念の成立の考察に加えて、二十世紀末の現在置かれている状況についても、若干の考察を加えることが出来たかと考える。\*

\* 本論文は、文部省科学研究費基盤研究 C2 (平成八年～平成十年)「近代ヨーロッパにおける進歩の理念」の研究報告である。

#### 引用文献

- J. B. Bury, 1955, *The Idea of Progress: An Inquiry into its Growth and Origin* (New York: Dover Publications), first published in 1932 by Macmillan. (高里良恭訳『人類進歩の史的考察』, 1928年, 博文館。)
- Fontenelle, 1991, *Oeuvres complètes*, Tome II, 1686-1688, Texte revu par Alain Niderst (Paris: Librairie Arthème-Fayard).
- Richard Foster Jones, 1965, *Ancients and Moderns*, 2d ed. (Berkeley: University of California Press).
- Christopher Lasch, 1991, "The Age of Limits", *History and the Idea of Progress*, edited by Arthur M. Meltzer, Jerry Weinberger, and M. Richard Zinman

- (Ithaca/London: Cornell University Press).
- Samuel L. Macey, 1986, "Literary Images of Progress: The Fate of an Idea", *Time, Science, and Society in China and the West: The Study of Time V.* edited by J. T. Fraser, N. Lawrence, and F. C. Haber (Amherst: University of Massachusetts Press).
- Samuel L. Macey, 1989, *The Dynamics of Progress: Time, Method, and Measure* (Athens: University of Georgia Press).
- Masaki Miyake, 1990, "General Comments on the Concepts of Historical Time", *17th International Congress of Historical Sciences*, I, Grands Thèmes, Méthodologie, Sections Chronologiques I: Rapports et abrégés (Madrid: Comité Español de Ciencias Históricas).
- Masaki Miyake, 1996, "Some Perspectives on the Idea of Progress as a Problem in the Study of Time: The Cases in China, Japan, and Russia in Comparison with Modern Europe", *Dimensions of Time and Life: The Study of Time VIII.* edited by J. T. Fraser and M. P. Soulsby (Madison, Connecticut: International Universities Press).
- Masaki Miyake, 1997 A, "The Idea of Progress in the West and the Non-Western World: A Comparative Approach", *The Bulletin of the Institute of Social Sciences, Meiji University*, Vol. 20, No. 3.
- Masaki Miyake, 1997 B, "Eschatology, Millenarianism and Periodization in Western and Non-Western Thought from the Book of Daniel to Karl Marx", *Periodization in History and Historiography: An Intercultural Comparison*, Conference sponsored jointly by the Commission on the History and Theory of Historiography, the Institute of History of the Hungarian Academy of Sciences, and the Europa Institute Budapest, Budapest, 4. July 1997.
- Reinhart Klemens Maurer, 1965, *Hegel und das Ende der Geschichte: Interpretation zur "Phänomenologie des Geistes"* (Stuttgart: Kohlhammer).
- Robert Nisbet, 1980, *History of the Idea of Progress* (New York: Basic Books).
- Blaise Pascal, 1953, *Oeuvres complètes*, Texte établi et annoté par Jacques Chevalier (Paris: Bibliothèque de la Pléiade).
- Charles Perrault, 1688, 1690, 1692 et 1697, *Parallèle des Anciens et des Modernes*, 4 vols.
- Charles Perrault, 1967, *Contes de Perrault*, Textes établis, avec introduction, sommaire biographique, bibliographie, notices, relevé de variantes, notes

et glossaire par Gilbert Rouger (Paris: Editions Garnier Frères).

John W. Yolton, ed., 1991, *The Blackwell Companion to the Enlightenment* (Oxford: Blackwell, 1991).

赤木昭三, 1975 年, 「進歩の思想形成についての一考察: 古代派・近代派論争をめぐって」 沢瀉久敬編『フランスの哲学 1』東大出版会。

赤木昭三, 1993 年, 『フランス近代の反宗教思想: リベルタンと地下写本』岩波書店。フォントネル, 赤木昭三訳, 1992 年, 『世界の複数性についての対話』(Bernard Le Bouvier de Fontenelle, *Entretiens sur la Pluralité des mondes habités*, 1686) 工作舎。

朝倉朗子訳, 1982 年, 『完訳ペロー童話集』岩波文庫。

岩坪紹夫, 1965 年, 「進歩の観念」, 野田又夫編, 思想の歴史 (7) 『市民社会の成立』平凡社。

コンドルセ著, 1951 年, 渡辺誠訳『人間精神進歩史』第一部, 岩波文庫。

フランシス・フクヤマ「歴史は終わったのか?」『月刊 Asahi』朝日新聞社, 1989 年 12 月号。Francis Fukuyama, "The End of History?", *The National Interest*, 16, Summer 1989.

真木悠介, 1981 年, 『時間の比較社会学』岩波書店。

パスカル, 1978 年, 中公パックス世界の名著 29 卷, 前田陽一責任編集『パスカル』中央公論社。

三宅正樹, 1993 年, 「20 世紀の歴史記述と時間意識: 進歩の観念と『古代・近代論争』」, 明治大学社会科学研究所紀要第 31 卷第 2 号。

三宅正樹, 1996 年, 「時間の比較文明論」, 井上俊・上野千鶴子・大沢真幸・見田宗介・吉見俊哉編, 岩波講座現代社会学第 6 卷, 『時間と空間の社会学』岩波書店。

クリストファー・ラッシュ著, 1997 年, 森下伸也訳『エリートの反逆: 現代民主主義の病い』新曜社。